「笹川杯作文コンクール 2010」～中国語で応募～ 第 3 回優秀賞作品

※原文に忠実に和訳しました。

「“踏み草”の有効活用」

浙江省　崔周道

私の出身地、浙江省イン州地区は“中国イグサの郷”である。地元農家で栽培されたイグサは、畳となって日本でよく売られている。イグサは寧波市の主要な輸出農産物の 1 つなのだ。

イン州地区では平年 10 万 t 余りのイグサが生産されるが、うち三分の一ほどは、長さなどの条件が規格外のため畑に捨てられる。いわゆる“踏み草”である。かつて、かなり長い間、乾燥後の”踏み草”は主に農家の調理用燃料として使われていた。1980 年代から、ガスコンロが普及するにつれ、家庭からかまどが姿を消していった。草を燃料にして調理することもなくなったのである。そのうち、“踏み草”をどう処理するかが、イグサ経済を発展させるための難題として持ち上がってきた。多くの農家では“踏み草”をその場で燃やしていた。そのため、毎年 6 月から 7 月の収穫期には、西郷平原の至るところでイグサを野焼きする煙が上がっていたものである。ある年、寧波櫟社空港の近くでイグサの野焼きが行われたために、その煙が空港上空の視界を遮ってしまい、寧波到着便 2 便が上海への着陸を余儀なくされた。

1993 年、寧波市政府は、櫟社空港一帯に煙の管理地域を設けるとの通告を出した。滑走路周辺の半径 2km 以内では、風速が 5m/秒未満の時にイグサや稲藁の野焼きを禁ずるとの内容である。しかし、当時は野焼きより合理的な処理方法がなかったため、禁止されていても、守る者はなかった。エネルギーの浪費だけでなく、大気の汚染という問題でもあった。

しかし、ケガの功名で、大規模イグサ農家の徐さんが “踏み草”問題の根本的な解決手段を偶然見つけたのである。2003 年のイグサの収穫時期で、手間暇のかかる晩稲の植え付けも目前に迫っており、徐さんは、晩稲の植え付けが遅れては耕地を荒らすのではないかと非常に心配していた。必要は、発明の母である。徐さんは、手伝いの人達にイグサの収穫を指示する前に、晩稲の種をイグサ畑に播いたのである。イグサの収穫が終わったら、そこで廃棄される“踏み草”を畑に敷き詰めて潅水する。そうすれば“踏み草”は自然と腐敗して、晩稲の元肥になるという考えである。その年の秋、その田から収穫された晩稲は何と 475kg/ムーもの豊作だったのである。通常農法の田地に比べて 25kg/ムーも収量が多かったのだ。翌年、徐さんはテスト面積を拡大し、そのテスト内容を農業技術部門に報告した。この省力化、環境親和型の増産技術は、2006 年からイグサ栽培地区で全面的に広まり始めた。

そこで、私は、日本は環境保護の意識が高く、国民の誰もが環境保護を重視する国柄だということをふと思い出した。日本のイグサ製品の消費者にとって、イグサ製品の加工過程で環境保護が進展したことは“高評価につながるグッドニュース”のはずではなかろうか？

“イグサを晩稲の苗代として直播きに利用する技術”を“特に意識しなくてもできる活動”と言うのであれば、踏み草を液化し、生分解性素材として、樹脂の代わりに包装箱、植木鉢に加工する試みは、意識的な環境保護への取り組みであり、より賞賛されることであろう。

現在、華東地域で最大規模の紙パルプのモールド製品メーカーである寧波海基包装製品有限会社公司は、“踏み草”を家電やパーソナルケア製品の内装材料やエコプランターなどに加工している。自然に帰るという環境保護の理念にも、国の固形廃棄物資源化、減量化、無害化要求にも適合するこの事業は、“草”をお金に変えるものだと言えるだろう。海基社のショールームでは、“踏み草”を利用して生産されたプランター、育苗ポット、使い捨て便器といった素晴らしい製品がたくさん並んでいる。

現在、中国国内では、多くの花卉生産拠点で樹脂製の使い捨て育苗ポットを利用している。苗木を植え替えると、ポットは用済みとなって埋め立てられるが、自然には分解されない。また焼却すれば、大気汚染の可能性がある。しかし、“踏み草”を原料とした育苗ポットなら、植物の根がポットを貫通できるため、植え替えの手間が省ける。数ヶ月後には育苗ポットが自然に分解され、肥料となるのだ。欧米では、こうした育苗ポットが一般家庭にも広く普及している。消費者は、苗木とポットを買って帰れば、植木鉢に直接その苗を植えるだけでいいのだ。

今のところ、価格などの理由で“踏み草”を原料とするエコ製品類の普及は、進んでいない。“名声があるのに、人気はない”状態である。ある花卉生産企業の経営者が、その理由を「樹脂ポットなら、コストは 0.05 元だが、エコポットは少なくとも 0.3 元はする。どっちを選べと言うのかね？」と答えている。

しかし、人々の環境保護意識が強まり、政府の指導や政策支援が強化されてくれば、それに伴って、人々や国のためになる環境保護製品が日常生活にもっと入り込んでくるに違いないと私達は確信している。遠くない将来、急速に成長したイグサ経済が、郷里の人々の暮らしを豊かにするとともに、“踏み草”も喜ばしい経済効果と社会効果を生み出すことができればと思う。